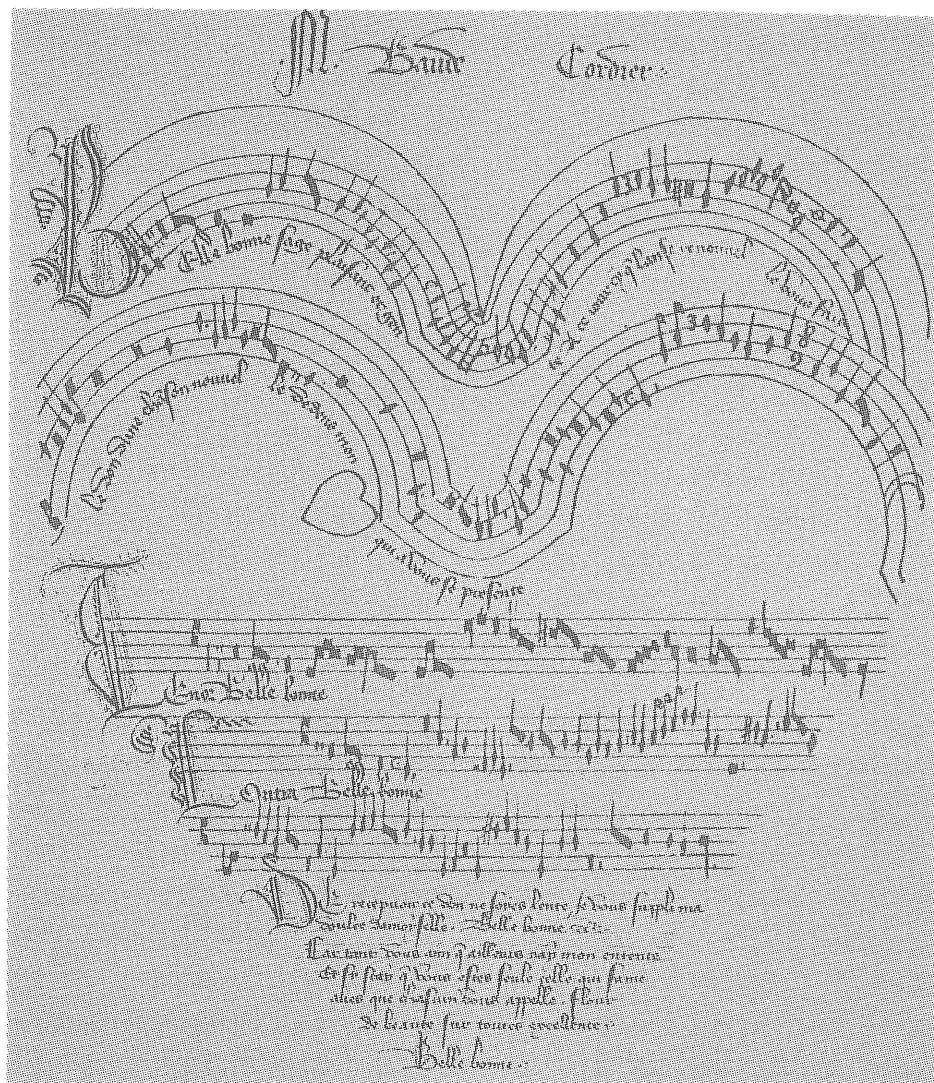


1988.4



Meie, din liechter schin und diu kleinen
vogelin bringent vröuden vollen schrin.
daz si willekomen sin! ich bin an den
vröuden min mit der werlde kranc.

教養図書館が新しくなる

手 塚 甫

すでにお気付きのように、教養図書館は、新規に、学生ホールに向きあって建設さるべく目下、槌音も高く工事が進んでおり、この秋には竣工する運びになっている。現在の教養図書館が出来てから凡そ20年が経って、諸設備に欠陥、故障が目立ちはじめ、その改修を待ち望んでいた我々も、このような形でそれが実現されることになろうとは、計画が決定を見るまで予想だにできなかった。まさに望外のこと、そのために尽力いただいた関係者の方々には、いくら感謝してもし尽せない気持ちである。と同時に、新築に寄せられた期待を思うにつけ、それを管理運営して行く責任の重さも感じないわけには行かない。しかも、その外観に相応しい内容をどれだけ盛込むことが出来るか、いい図書館だと本当に言われるには、図書館側として、何をしなければならぬのかを考えると、ただ喜んでばかりもいられないのである。いくら教養図書館だからといって「教養」のための単なるアクセサリーでいい筈がない。さりとて、図書館を、これまで専ら利用する者の立場から見て来た者にとって、図書館の側から見てどうあるのがいいのか、見当をつけにくい。尤も、図書館は何よりもそこを利用する者を第一に考えるべきなのだから、これまでの経験が全く役に立たないということもあるまい。

「よい図書館」と呼ぶべきか否かは暫く措くとして、図書館と言われてすぐに思い出すものが、僕にもいくつかある。そして、それを思い出す時、決ってある種の懐しさが伴う。

それは、僕にとって、たゞ建物としてあるのではない。大袈裟な言い方だと自分でも思うが、己の精神の遍歴とも言うべきものと重なりあった懐しさと言ったらいいのであろうか。その時々自分が抱えていた想い、模索していた問題、塞がれた出口に突破口を求めてウロウロしていた自分の姿がそれに重なり合う。そしてそれらの図書館で、問題解決のなんらかの糸口を見つけ得た安堵感もそれと分ち難い。その糸口は、たまたま開いた本の中で見つけたことも稀にはあったが、必要な本へと導いてくれようとした親切な人がそこには居た。僕にとって忘れ難い図書館とは、それらのことが幾重にか織り込まれたものだ。だから、それは中央にある、規模の大きい、設備の整った図書館とは限らない。むしろ、地方の、あるいはこじんまりとした図書館が殆んどだ。そこに働いている司書の人、同じ閲覧者仲間の顔が直ちに思い浮ぶ、その人達の話しぶりや笑顔を、教えて貰ったことと併せて本当に懐しく思い出す。これらの図書館は、僕にとってある意味で学校以上にかけがえないものである。今、輪郭を少しづつはつきりさせて行く新しい建物の姿を眺めつゝ、この新しい教養図書館を利用するであろう人達を思う時、頭に浮ぶのはやはりかつて自分が過した図書館でのことである。確かに、自分にとって「よい図書館」であったと思う。

教養図書館は、規模も外観もすっかり立派に改まって生れ変わる。視聴覚機器、あるいは

情報関係機器の、最近の著しい進歩に伴ってどの図書館も、当世、その導入に熱心で、我が図書館にも、勿論一度に全てとは行かなくとも、それに相応しいと思うものは出来るだけ備えて行きたいと願っている。それを思うと最近すっかり鈍くなったらしいわが心も、今から踊る。が、要は、それをどのように使いこなすかだ。立派な書架、立派な閲覧席も結構だが、それより先に、一冊一冊の本に、それを読みたいと求めて来る者への心配りの行き届いた書架こそまず求められるべきだろう。新しい機器も、利用する者が使いこなしてこそ、それを使うことで、知る喜びをいや増してこそ意味を持つ。心の空ろを、わだかまりを何とかしたいと思ってやって来る人達…、他に増して教養図書館にこそそのような人達が多く来るはずだと思うのだが、そういう人達へのやさしい心遣いに溢れた図書館でありたいと思う。だが、それを一方的に館員にだけ求められても困る。前にも触れたように、図書館の主役は利用者である。それを利用しようとする者の思いこそが、ここでの出発点である。細やかな心遣いも、その細やかさを理解し得る感受性の持ち主に回り合えてこそ生きてくる。利用者の熱心さ、生き生きとした反応があってはじめて館員の仕事への励みも湧いて来ようというものである。分らないことは、どんどん館員に聞いたらよい。図書館の不備は遠慮なく指摘したらよい。そのような利用者の強い関心こそが図書館員を支え、よりよい図書館への努力に何ものにも代え難い大きな励みともなるのだ。自分の与えたヒントを基に、利用者がその先へ更に自力でどんどん分け入って行く姿を見て、館員は喜び以外の気持ちを持ち得ないはずだと思う。

図書館が新しくなるからと言って、そこに必要なものが何もかも揃っているというわけではない。たゞそこへ行けばよいというものでもない。否、求めるものがすぐには見つから

ない場合の方が多いかも知れない。その不足は、ともあれ、求めている者と、その求めに応じようとする者が、互に想いを寄せあって補って行く他はない。そして、それが円滑に出来さえすれば、仮りに他に不足するものがいかにあろうと「よい図書館」と言って何の憚ることもなからう。

図書館が新しくなろうとする今こそ、互に図書館のあるべき出発点に立戻って考える時ではないのであろうか。

(教養図書館長)

「講義用参考文献」と 「ゼミ指定図書」

図書館では、講義の理解に役立つ参考書をはじめ、先生方が講義の際に触れられる可能性のある図書を購入して利用の便宜を計っております。書架はカウンターの左側。利用方法・貸出期間等は一般図書と同様です。大いに利用して下さい。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆		
☆☆	閲覧証の交付	☆☆
☆☆	教養図書館を利用するには、閲覧証が必要です。新入生の皆さんには、下記の日程で交付します。当日カウンターまで取りに来て下さい。ただし、医学部は医学図書館で4月26日以降交付します。	☆☆
☆☆	なお、交付までの間は、学生証を使用して下さい。	☆☆
☆☆	衛生学部	4月25日(月)
☆☆	薬学部	4月26日(火)
☆☆	獣医畜産学部	4月27日(水)
☆☆	水産学部	4月28日(木)
☆☆	看護学部	4月28日(木)
☆☆		
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆		

英語の洒落(しゃれ)

稲見 芳勝

昔アメリカに留学したとき日本は今のよう
な経済大国ではなく、まだアメリカの保護国
同然だった。そのせいとかどこへ行っても旧敵
国民という悪意ある扱いは受けなくて、むしろ
「アメリカ国民のゲスト」とよく呼ばれた
ものだった。旅費、学費、生活費等一切がア
メリカ納税者の懐から出ていたのだから、確
かにゲストではあった。時々地元のロータリ
ー・クラブなどの集まりやテレビに招かれて
日本の話をした。アメリカの聴衆は話の所々
にジョークがないと、内容に関係なく今日の
話はつまらなかったと言う。英語で当意即妙
のジョークを言うことは私にはできない芸当
なので、あらかじめいくつか用意しておいた
ものを使った。

その一つ、前夜遅く横須賀に入港したオハ
イオ州出身の水兵二人、冒険の期待に胸をふ
くらませて早朝の街に飛び出した。勤めに急
ぐ人達が元気に朝の挨拶を交わしていた。し
ばらくして水兵の一人が言う。「どうしてこ
の街の連中は俺達の故郷を知ってるのかな」
ここでちょっともったいぶって一座を眺め渡
してから種明しをする。“The Japanese for
'good morning' is 'ohayoo'.”言うまで
もなく「おはよう」と「オハイオ」の駄洒落
に過ぎないが、これはずいぶん受けてあちこ
ちで笑ってもらった。実は日本の高校用副読
本にのっていた笑話だった。

もう一つよく使った洒落。飲み過ぎて胃を
こわした男が医者に見せられ、「水しか
飲めない」としよげている。そこでこう言っ

てやる。“Water is a nice drink if you
take it with the right spirit,”これも非
常な喝采を博した。spirit には「魂、精神」
のほかに「(強い)酒」の意味があり、「心
がけ良く飲めば水は良い飲み物」と「適当な
酒を混ぜて飲めば水は良い飲み物」の両様の
意味になる洒落である。勿論私の創作ではな
く、何かの雑誌で仕入れたものだった。

旅の途中シカゴでボードビル(イギリスな
らミュージック・ホール)に入った。出し物
は歌、ダンス、奇術、声帯模写、百面相に漫
談、漫才に相当するものまであって、日本の
寄席に良く似ていた。客席は爆笑で沸いてい
たが、情けないことに私には笑えない。全然
分からないのだ。日本女性と結婚して第二次
大戦中も日本に留まったイギリス人の先生が
「落語は分かりませんね」と言われていたの
を思い出し、じっと我慢して聴いていると、
ついに分かる洒落に出くわした。それは二人
の対話で、一方がボケ役を演じる点は日本の
漫才そっくりだったが、そのボケが相棒に尋
ねる。「西部へ行って一山当たたいんだが、
道具は何を持って行けばいいかね」相棒は
“Take your own pick.”と答えるので、ボ
ケは「？」pickは「つるはし」と「選択」
の意味があり、相棒の返事は「自分のつるは
しを持って行け」と「自分で選べ」の両方の
意味になる。さすがにこれは私にも分かり、
即座に周りに負けないような高笑いをして溜
飲が下がった。

初めて本格的に習ったシェークスピア劇は
『ジュリアス・シーザー』で、冒頭の場面か
ら洒落がいっぱいだが、当時の学力では先生
に指摘されるまでは気付かない場合が多かっ
た。シェークスピア劇に多い洒落・地口の類
を日本語で生かして上演するのは大変な仕事
だろうと思う。

以前は出来の良い都立高校で副読本に使う

こともあった『チップス先生さようなら』という英国の小説がある。映画にもなった。主人公はパブリック・スクールで古代ローマの言葉であるラテン語を教える老教師だが、授業中よく駄洒落を飛ばす。ある日 Lex Canuleia (カヌレイア法) の話をする。これは貴族の息子と平民の娘との結婚を認める法律だが、チップス先生はこう説明する。「この法律ができてからは、貴族の息子が平民の娘を誘惑して結婚を迫られたとき、『だめだ、身分違いの結婚は許されない』と言い逃れることはできなくなった。娘は言う。“Oh, yes, you can, you liar!” (いいえ、できるわ、うそつきね)」小説には「ここでどっと爆笑が起こる」とある。学生時代初めてこの作品を読んだとき、主人公の説明がどっと爆笑を惹き起こすほどおかしいものとはどうしても思えなかった。幾度か文脈をたどり直してみたが分からない。何気なく娘の言葉を何回か口に出して言ってみた。するとはっと気が付いた。身分違いの結婚を認める法律の名前 Lex Canuleia と、娘の言葉 “Oh, yes, you can, you liar!” の双方の下線部が語呂合わせになっているのだ。こういう洒落は翻訳不可能だが、この作品の新潮文庫版ではどうなっていたらうか。古い版はひどい誤訳が多かったが、最近の版は直っていることだろう。

「意識の流れ」という手法を駆使したアイランドの作家ジェームス・ジョイスの作品では、一つの言葉の響きが次々といろいろな連想を生み出していくところは洒落の連続のようなものだ。彼を “the greatest punster that ever lived” (史上最大の駄洒落屋) と呼んだ人もある。難しい作家だ。

通勤の車中で聴くラジオの FEN 放送ではよくコミック物をやっていて、げらげら笑い声が起こっているが分からないことも多い。長年英語を中心に暮らしてきてまだこの程度か

と、我ながら本当に情けない。修業の道は遠いと思ってしまう。

(英語)

図書館利用 Q & A 貸出

Q：本を借りるには、どうしたらいいですか？

A：館外貸出は閲覧証を提出し、貸出票とブックカードに必要事項を記入し、返却日を押してもらって下さい。
図書館内で閲覧する時は、閲覧証とブックカードをカウンターに提出するだけです。

Q：何日間借りられますか？

A：貸出期間は一週間です。
洋書は二週間です。

但し、新着雑誌は午後 4 時から翌日の午前 11 時までの一夜貸しをしています。

また、期限内に読み切れなかった場合は、その本と閲覧証を持参すれば、予約がない限り延長できます。

Q：何冊借りられますか？

A：貸出冊数の制限はありません。
何冊でも御自由に。持てるだけどうぞ。

Q：借りたい本がないんですが。

A：貸出されているかもしれません。
カウンターで確認して下さい。
その場で予約することができます。

このウソ どこまでホント？

う の うら ひろし
鵜 浦 裕

もう時効だから恥を忍んで言うのだが、昨年の講義を振り返って、自分は教壇の上から一体何度間違ったことを口走ったか、と今つくづく思う。たとえ身に覚えがなくともそう断言されれば否定する自信はない。もちろん自分で気づいた間違い、また学生から指摘を受けた間違いは、必ずそれを訂正した。しかし幸か不幸かどちらも気づかずに闇の彼方へ葬り去られたものもある。

開き直るつもりはないが、教員にこのような「ウソ」はつきものである。否、一年も講義を続ければ誰だって一度や二度は間違う。しかし聞き手の側としては本来、教員の意図せざるウソを見過ごすわけにはいかない。黙して信じることに慣れてしまった学生、だまされてもいいと考えている学生は論外である。教員にウソがつきものなら、学生にはその「ウソ発見器」になってもらいたい。さらに、そのウソからホントを引き出す技を自分なりにみつけてもらいたいのである。

学問や教育の世界でも、訂正されなければならぬウソが平気でまかり通っていることも往々にしてある。中学高校教育の教科書の中で、或いは世間の半ば常識として新聞や学術論文の中で堂々とはばを利かしているのである。

例えば工業化に伴う社会構造の変化（教員のノリでいうと、近代化の随伴現象）の一つにC. クラークの仮説がある。これは工業化に伴う産業別就業人口比の推移を一般化した法則であると同時に、各国の近代化レベル

を測るためのものさし（教員のノリで、指標）の役割を果たしている。具体的には、第①次産業人口、第②次産業人口、第③次産業人口の大小関係が、工業化以前の①>②>③、工業化期の②>③>①、高度工業化時代の③>②>①という順に変化することを指す。この型に②が最小になる時期はない。

クラークは、世界で最初に工業化を達成した西欧の経験からこの法則を引き出した。（にもかかわらず）この法則は日本を含めて工業化を経験するすべての国に当てはまる、と大口をたたいたのである。偉い人にこれだけ大ミエきられちゃうと、小心者はそれだけで「負けた」と畏まってしまう。しかし勉強するときだけ国粋主義者になる私はビビリながらも「このウソどこまでホント（若者のノリで、マジマジ）？」、「かつての日本が芸能レポーターのように西欧の後を追いかけていたなんて？」などと言いつつ統計をひもとく。すると日本には（ちなみに韓国でも）何と①>③>②となる時期があるではないか。この事実だけで単純な私は「勝ったな」と思ってしまう。それにもかかわらず中高教育では、このクラークの仮説がホントのこととして教えられているのである。食糧自給率がかなり低く、その意味で脆弱な日本でクラークの仮説が近代化の指標になっては困るはずである。それともホステス（＝③）ばかりを増やしてみんなでアル中にでもなろうと言うのであろうか。

今度は世間の常識からもう一つウソの例を

挙げてみよう。新聞などで、現代社会では核家族（夫婦とその未婚の子供からなる家族）化が進行しているという内容の記事をよくみかける。しかしこの問題に関してもやはり、「このウソどこまでホント？」と自問したほうがよい。アレコレ考えるより、親戚はじめ自分の周囲を見渡して、核家族が多いと感じられるだろうか。また現代社会にこの型の家族がフィットしていると思えるだろうか。いずれにせよ離婚が増え、ホモやレズに市民権が認められ、地価高騰により手軽に家を構えることができなくなったいま、ヘーベルハウスは増えても核家族が増えるはずがない。また戸籍上、核家族であっても夫が単身赴任で（独身のふりをするので）あれば、その家庭は現実には母子家庭に近い。つまり日本の核家族化は一人所帯と母子家庭からなる場合が多いのかもしれない。どちらもアブナイ状況である。

そもそも家族には様々な形があって（知識人のノリで、多元的）よいと思う。一人だって、れっきとした（単身）家族である。それにもかかわらず、「核家族化が進行している」などとまことしやかに語られるのはなぜだろうか。きっと誰かが我々を一つの都合の良い型にはめこもうとしているのかもしれない。これにダマされて核家族がノーマルな型だと思い込むと、「あそこは母子家庭だから……

……」などといって醜い差別心をさらけ出すことになる。こんなことにならないためにも、核家族コオロギ、いやイデオロギーにたいしては、「このウソどこまでホント？」と、とりあえず疑ってみなければならない。

それではクラークの仮説にせよ、核家族イデオロギーにせよ、ウソだからといって、完全に無視してよいものであろうか。そうではない。むしろこのウソがあったからこそ、よりホントに近いことがわかったと言えよう。その意味でウソは、比没有強。

教壇の上から教員が話すことも同じである。「ご説ご尤も」などとすべてを鵠呑みにしてはならない。必ず意図せざるウソがあるからである。しかしウソがあるからといって耳をふさぐのもよくない。教員の話しの中からウソを発見し、できればそれをよりホントに近づけることが必要である。そのために学生には「このウソどこまでホント？」という気持ちで授業に臨んでもらいたい。そうすれば教員の側もウカウカしておれない。そしてこのような両者の緊張関係こそ講義を活性化していく一つの原動力となるはずである。

かく言う私も教員のはしくれであれば、このウソ一体どこまでホント？？？

（英 語）

雑 誌

一階の雑誌コーナーの書架表側には新着雑誌が、扉を開けると中に、その年のバック・ナンバーが入っています。一年分がまとまると製本され、二階の書架に排架されます。ただし、1980年以前の雑誌や、雑誌コーナーにない雑誌については、カウンターでおたずね下さい。

訂 正

閲覧ニュース53号（1987.12 発行）に、下記の誤りがありましたので、お詫びして訂正致します。

頁	行	誤	正
1	8	新訳聖書	新約聖書
2	左 4	海豚	河豚

表紙解説

春、心の芽ばえ

石 多 正 男

表紙のハート型の模様（？）は15世紀初頭に作られたフランスのシャンソンの楽譜。恋を歌った歌だから、当時の人々は楽譜もハート型で記した。歌詞が「わが心」となっていると、楽譜には「わが♡」（楽譜中央部）と書くなど、フランスらしい。その下の詩は13世紀ドイツのもの。ナイトハルト・フォン・ロイエンタール作と伝えられる「五月の明るい輝に」の冒頭部分である。原詩全体の大まかな内容は次の通り。

さあ、春本番！
五月の太陽は明るく輝き、
小鳥のさえずりも楽しく響く。
重く暗いのはぼくの心、
愛するあの女が冷たいから！
なんともぼくは情けない。
あの女がこっちを向いてくれたなら、
目と目でお話、
愛の絆が結ばれるのに……………

春，古今東西を問わず人は新しいものへ希望を抱く。大地から草木が育ち，世界は花の色と緑に包まれる。木々には鳥たちが楽しげに歌を歌う。みなが新しいものを産み出そうと心はずませる春，大学も新たな一年が始まる。大いに学び，恋をし，青春を，人生を謳歌しようではないか。

（独 語）

『楽譜の歴史』 皆川達夫著 音楽之友社
1985年3月 発行（7612/Mi 36）

編集後記

新入生の皆さん，ご入学おめでとうございます。

教養図書館では，この『閲覧ニュース』を年，数回発行しています。蔵書紹介や新着図書案内，エッセイやその時々のお知らせなど，

利用の手びきとして，『図書館利用案内』とあわせて御覧下さい。

今回は，手塚・稲見・鶴浦各先生方にエッセイを，石多先生に表紙解説をお願いしました。

閲覧ニュース54号

1988. 4 発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里1-15-1

発行責任者 手 塚 甫

電話（0427）78-8005